『私は其儘二三日過ごしました。其二三日の間Kに對する絶えざる不安が私の胸を重くしてゐたのは云ふ迄もありません。私はたゞでさへ何とかしなければ、彼に濟まないと思つたのです。其上奥さんの調子や、お嬢さんの態度が、始終私を突ッつくやうに刺戟するのですから、私は猶辛かつたのです。何處か男らしい氣性を具へた奥さんは、何時私の事を食卓でKに素ぱ抜かないとも限りません。それ以來ことに目立つやうに思へた私に對するお嬢さんの擧止動作も、Kの心を曇らす不審の種とならないとは斷言出來ません。私は何とかして、私と此家族との間に成り立た新しい關係を、Kに知らせなければならない位置に立ちました。然し倫理的に弱點をもつてゐると自分で自分を認めてゐる私には、それがまた至難の事のやうに感ぜられたのです。

私は仕方がないから、奥さんに頼んでKに改めてさう云つて貰はうかと考へました。無論私のゐない時にです。然しありの儘を告げられては、直接と間接の區別がある丈で、面目のないのに變りはありません。と云つて、拵え

事を話して貰はうとすれば、奥さんから其理由を詰問されるに極つてゐます。もし奥さんに總ての事情を打ち明けて頼むとすれば、私は好んで自分の弱點を自分の愛人と其母親の前に曝け出さなければなりません。眞面目な私には、それが私の未來の信用に關するとしか思はれなかつたのです。結婚する前から戀人の信用を失ふのは、たとひ一分一厘でも、私には堪へ切れない不幸のやうに見えました。

要するに私は正直な路を歩く積で、つい足を滑らした馬鹿ものでした。もしくは狡猾な男でした。さうして其處に氣のついてゐるものは、今の所たゞ天と私の心だけだつたのです。然し立ち直つて、もう一歩前へ踏み出さうとするには、今滑つた事を是非共周圍の人に知られなければならない窮境に陷つたのです。私は飽くまで滑つた事を隱したがりました。同時に、何うしても前へ出ずには居られなかつたのです。私は此間に挾まつてまた立ち竦みました。

五六日經つた後、奥さんは突然私に向つて、Kにあの事を話したかと聞くのです。私はまだ話さないと答へました。すると何故話さないのかと、奥さんが私を詰るのです。私は此問の前に固くなりました。其時奥さんが私を驚かした言葉を、私は今でも忘れずに覺えてゐます。

『道理で妾が話したら變な顔をしてゐましたよ。貴方もよくないぢやありませんか、平生あんなに親しくしてゐる間柄だのに、默つて知らん顔をしてゐるのは』

私はKが其時何か云ひはしなかつたかと奥さんに聞きました。奥さんは別段何にも云はないと答へました。然し私は進んでもつと細かい事を尋ねずにはゐられませんでした。奥さんは固より何も隱す譯がありません。大した話もないがと云ひながら、一々Kの樣子を語つて聞かせて呉れました。

奥さんの云ふ所を綜合して考へて見ると、Kは此最後の打擊を、最も落付いた驚きをもつて迎へたらしいのです。Kはお嬢さんと私との間に結ばれた新しい關係に就て、最初は左右ですかとたゞ一口云つた丈だつたさうです。然し奥さんが、『あなたも喜んで下さい』と述た時、彼ははじめて奥さんの顔を見て微笑を洩らしながら、『御目出たう御座います』と云つた儘席を立つたさうです。さうして茶の間の障子を開ける前に、また奥さんを振り返つて、『結婚は何時ですか』と聞いたさうです。それから『何か御祝を上げたいが、私は金がないから上げる事が出來ません』と云つたさうです。奥さんの前に坐つてゐた私は、其話を聞いて胸が塞がるやうな苦しさを覺えました。

四十八

『勘定して見ると奥さんがKに話をしてからもう二日餘りになります。其間Kは私に對して少しも以前と異つた樣子を見せなかつたので、私は全くそれに氣が付かずにゐたのです。彼の超然とした態度はたとひ外觀だけにもせよ、

敬服に値すべきだと私は考へました。彼と私を頭の中で並べてみると、彼の方が遙に立派に見えました。『おれは策略で勝つても人間としては負けたのだ』といふ感じが私の胸に渦卷いて起りました。私は其時さぞKが輕蔑してゐる事だらうと思つて、一人で顔を赧らめました。然し今更Kの前に出て、恥を掻かせられるのは、私の自尊心にとつて大いな苦痛でした。

私が進まうか止さうかと考へて、兎も角も翌日迄待たうと決心したのは土曜の晩でした。所が其晩に、Kは自殺して死んで仕舞つたのです。私は今でも其光景を思ひ出すと慄然とします。何時も東枕で寢る私が、其晩に限つて、偶然西枕に床を敷いたのも、何かの因縁かも知れません。私は枕元から吹込む寒い風で不圖目を覺したのです。見ると、何時も立て切つてあるKと私の室との仕切の襖が、此間の晩と同じ位開いてゐます。けれども此間のやうに、Kの黑い姿は其處には立つてゐません。私は暗示を受けた人のやうに、床の上に肱を突いて起き上りながら、屹とKの室を覗きました。洋燈が暗く點つ

てゐるのです。それで床も敷いてあるのです。然し掛蒲團は跳返されたやうに裾の方に重なり合つてゐるのです。さうしてK自身は向ふむきに突つ伏してゐるのです。

私はおいと云つて聲を掛けました。然し何の答もありません。おい何うかしたのかと私は又Kを呼びました。それでもKの身體は些とも動きません。私はすぐ起き上つて、敷居際迄行きました。其所から彼の室の樣子を、暗い洋燈の光で見廻して見ました。

其時私の受けた第一の感じは、Kから突然戀の自白を聞かされた時のそれと略同じでした。私の眼は彼の室の中を一目見るや否や、恰も硝子で作つた義眼のやうに、動く能力を失ひました。私は棒立に立竦みました。それが疾風の如く私を通過したあとで、私は又あゝ失策つたと思ひました。もう取り返しが付かないといふ黑い光が、私の未來を貫いて、一瞬間に私の前に横たはる全生涯を物凄く照しました。さうして私はがた〳〵顫へ出したのです。

それでも私はついに私を忘れる事が出來ませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは豫期通り私の名宛になつてゐました。私は夢中で封を切りました。然し中には私の豫期したやうな事は何にも書いてありませんでした。私は私に取つて何んなに辛い文句が其中に書き列ねてあるだらうと豫期したのです。さうして、もし夫が奥さんやお嬢さんの眼に觸れたら、何んなに輕蔑されるかも知れないといふ恐怖があつたのです。私は一寸眼を通した丈で、まづ助かつたと思ひました。(固より世間體の上丈で助かつたのですが、其世間體が此場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。)

手紙の内容は簡單でした。さうして寧ろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するといふ丈なのです。それから今迄私に世話になつた禮が、極あつさりした文句で其後に付け加へてありました。世話序に死後の片付方も頼みたいといふ言葉もありました。奥さんに迷惑を掛

私は時々奥へ行つて奥さんを起さうといふ氣になります。けれども女に此恐ろしい有樣を見せては惡いといふ心持がすぐ私を遮ります。奥さんは兎に角、お嬢さんを驚かす事は、とても出來ないといふ强い意志が私を抑へつけます。私はまたぐる〳〵廻り始めるのです。

私は其間に自分の室の洋燈を點けました。それから時計を折々見ました。其時の時計程埒の明かない遲いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明けに間もなかつた事丈は明らかです。ぐる〳〵廻りながら、其夜明けを待ち焦れた私は、永久に暗い夜が續くのではなからうかといふ思ひに惱まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。學校が八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合ないのです。下女は其關係で六時頃に起きる譯になつてゐました。然し其日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと云つて注意して呉れました。奥さんは私の足音

それでも私はついに私を忘れる事が出來ませんでした。私はすぐ机の上に置いてある手紙に眼を着けました。それは豫期通り私の名宛になつてゐました。私は夢中で封を切りました。然し中には私の豫期したやうな事は何にも書いてありませんでした。私は私に取つて何んなに辛い文句が其中に書き列ねてあるだらうと豫期したのです。さうして、もし夫が奥さんやお嬢さんの眼に觸れたら、何んなに輕蔑されるかも知れないといふ恐怖があつたのです。私は一寸眼を通した丈で、まづ助かつたと思ひました。（固より世間體の上丈で助かつたのですが、其世間體が此場合、私にとつては非常な重大事件に見えたのです。）

手紙の内容は簡單でした。さうして寧ろ抽象的でした。自分は薄志弱行で到底行先の望みがないから、自殺するといふ丈なのです。それから今迄私に世話になつた禮が、極あつさりした文句で其後に付け加へてありました。世話序に死後の片付方も賴みたいといふ言葉もありました。奥さんに迷惑を掛

欠

欠

私は時々奥へ行つて奥さんを起さうといふ氣になります。けれども女に此恐ろしい有樣を見せては惡いといふ心持がすぐ私を遮ります。奥さんは兎に角、お嬢さんを驚かす事は、とても出來ないといふ强い意志が私を抑へつけます。私はまたぐる〳〵廻り始めるのです。

私は其間に自分の室の洋燈を點けました。それから時計を折々見ました。其時の時計程埒の明かない遲いものはありませんでした。私の起きた時間は、正確に分らないのですけれども、もう夜明けに間もなかつた事丈は明らかです。ぐる〳〵廻りながら、其夜明けを待ち焦れた私は、永久に暗い夜が續くのではなからうかといふ思ひに惱まされました。

我々は七時前に起きる習慣でした。學校が八時に始まる事が多いので、それでないと授業に間に合ないのです。下女は其關係で六時頃に起きる譯になつてゐました。然し其日私が下女を起しに行つたのはまだ六時前でした。すると奥さんが今日は日曜だと云つて注意して呉れました。奥さんは私の足音

で眼を覺したのです。私は奥さんに眼が覺めてゐるなら、一寸私の室まで來て呉れと頼みました。奥さんは寢衣の上へ不斷着の羽織を引掛て、私の後に跟いて來ました。私は室へ這入るや否や、今迄開いてゐた仕切の襖をすぐ立て切りました。さうして奥さんに飛んだ事が出來たと小聲で告げました。奥さんは何だと聞きました。私は顫で隣の室を指すやうにして、『驚いちや不可ません』と云ひました。奥さんは蒼い顔をしました。『奥さん、Kは自殺しました』と私がまた云ひました。奥さんは其處に居竦まつたやうに、私の顔を見て默つてゐました。其時私は突然奥さんの前へ手を突いて頭を下げました。

『濟みません。私が惡かつたのです。あなたにもお嬢さんにも濟まない事になりました』と詫まりました。私は奥さんと向ひ合ふ迄、そんな言葉を口にする氣は丸でなかつたのです。然し奥さんの顔を見た時不意に我とも知らず左右云つて仕舞つたのです。Kに詫まる事の出來ない私は、斯うして奥さんとお嬢さんに詫びなければゐられなくなつたのだと思つて下さい。つまり私の自然が平生の私を出し拔いてふら〳〵と懺悔の口を開かしたのです。奥さんがそんな深い意味に、私の言葉を解釋しなかつたのは私にとつて幸ひでした。蒼い顔をしながら、『不慮の出來事なら仕方がないぢやありませんか』と慰めるやうに云つて呉れました。然し其顔には驚きと怖れとが、彫り付けられたやうに、硬く筋肉を攫んでゐました。

五十

『私は奥さんに氣の毒でしたけれども、また立つて今閉めたばかりの唐紙を開けました。其時Kの洋燈に油が盡きたと見えて、室の中は殆ど眞暗でした。私は引き返して自分の洋燈を手に持つた儘、入口に立つて奥さんを顧みました。奥さんは私の後から隱れるやうにして、四疊の中を覗き込みました。然し這入らうとはしません。其處は其儘にして置いて、雨戸を開けて呉れと私

に云ひました。

それから後の奥さんの態度は、さすがに軍人の未亡人だけあつて要領を得てゐました。私は醫者の所へも行きました。又警察へも行きました。然しみんな奥さんに命令されて行つたのです。奥さんはさうした手續の濟む迄、誰もKの部屋へは入れませんでした。

Kは小さなナイフで頸動脈を切つて一息に死んで仕舞つたのです。外に創らしいものは何にもありませんでした。私が夢のやうな薄暗い灯で見た唐紙の血潮は、彼の頸筋から一度に迸つたものと知れました。私は日中の光で明かに其迹を再び眺めました。さうして人間の血の勢といふものゝ劇しいのに驚きました。

奥さんと私は出來る丈の手際と工夫を用ひて、Kの室を掃除しました。彼の血潮の大部分は、幸ひ彼の蒲團に吸收されてしまつたので、疊はそれ程汚れないで濟みましたから、後始末はまだ樂でした。二人は彼の死骸を私の室に入れて、不斷の通り寢てゐる體に横にしました。私はそれから彼の實家へ電報を打ちに出たのです。

私が歸つた時は、Kの枕元にもう線香が立てられてゐました。室へ這入るとすぐ佛臭い煙で鼻を撲たれた私は、其煙の中に坐つてゐる女二人を認めました。私がお嬢さんの顔を見たのは、昨夜來此時が始めてゞした。お嬢さんは泣いてゐました。奥さんも眼を赤くしてゐました。事件が起つてからそれ迄泣く事を忘れてゐた私は、其時漸く悲しい氣分に誘はれる事が出來たのです。私の胸はその悲しさのために、何の位寛ろいだか知れません。苦痛と恐怖でぐいと握り締められた私の心に、一滴の潤を與へてくれたものは其時の悲しさでした。

私は默つて二人の傍に坐つてゐました。奥さんは私にも線香を上げてやれと云ひます。私は線香を上げて又默つて坐つてゐました。御嬢さんは私には何とも云ひません。たまに奥さんと一口二口言葉を換す事がありましたが、

其は當座の用事に即いてのみでした。お嬢さんにはKの生前に就いて語る程の餘裕がまだ出て來なかつたのです。私はそれでも昨夜の物凄い有樣を見せずに濟んでまだ可かつたと心のうちで思ひました。若い美しい人に恐ろしいものを見せると、折角の美しさが、其爲に破壞されて仕舞ひさうで私は怖かつたのです。私の恐ろしさが私の髮の毛の末端迄來た時ですら、私はその考へを度外に置いて行動する事は出來ませんでした。私には綺麗な花を罪もないのに妄りに鞭うつと同じやうな不快がそのうちに籠つてゐたのです。

國元からKの父と兄が出て來た時、私はKの遺骨を何處へ埋るかに就いて自分の意見を述べました。私は彼の生前に雜司ヶ谷近邊をよく一所に散歩した事があります。Kには其處が大變氣に入つてゐたのです。それで私は笑談半分に、そんなに好なら死んだら此處へ埋て遣らうと約束した覺えがあるのです。私も今其約束通りKを雜司ヶ谷へ葬つたところで、何の位の功德になるものかとは思ひました。けれども私は私の生きてゐる限り、Kの墓の前に跪づいて月々私の懺悔を新にしたかつたのです。今迄構ひ付けなかつたKを、私が萬事世話をして來たといふ義理もあつたのでせう、Kの父も兄も私の云ふ事を聞いて呉れました。

五十一

『Kの葬式の歸り路に、私はその友人の一人から、Kが何うして自殺したのだらうといふ質問を受けました。事件があつて以來私はもう何度となく此質問で苦しめられてゐたのです。奥さんもお嬢さんも、國から出て來たKの父兄も、通知を出した知り合ひも、彼とは何の緣故もない新聞記者迄も、必ず同樣の質問を私に掛ない事はなかつたのです。私の良心は其度にちく〳〵刺されるやうに痛みました。さうして私は此質問の裏に、早く御前が殺したと白狀してしまへといふ聲を聞いたのです。

私の答は誰に對しても同じでした。私は唯彼の私宛で書き殘した手紙を繰返すだけで、外に一口も附加へる事はしませんでした。葬式の歸りに同じ問を掛けて、同じ答を得たKの友人は、懷から一枚の新聞を出して私に見せました。私は歩きながら其友人によつて指し示された箇所を讀みました。それには K が父兄から勘當された結果厭世的な考へを起して自殺したと書いてあるのです。私は何にも云はずに、其新聞を疊んで友人の手に歸しました。友人は此外にもKが氣が狂つて自殺したと書いた新聞があると云つて敎へて呉れました。忙しいので、殆ど新聞を讀む暇のなかつた私は、丸でさうした方面の知識を缺てゐましたが、腹の中では始終氣にかゝつてゐた所でした。私は何よりも宅のものゝ迷惑になるやうな記事の出るのを恐れたのです。ことに名前丈にせよお嬢さんが引合に出たら堪まらないと思つてゐたのです。私は其友人に外に何とか書いたのはないかと聞きました。友人は自分の眼に着いたのは、たゞ其二種ぎりだと答へました。

私が今居る家へ引越したのはそれから間もなくでした。奥さんもお嬢さんも前の所にゐるのを厭がりますし、私も其夜の記憶を毎晩繰返すのが苦痛だつたので、相談の上移る事に極めたのです。

移つて二ヶ月程してから私は無事に大學を卒業しました。卒業して半年も絶たないうちに、私はとう〳〵お嬢さんと結婚しました。外側から見れば、萬事が豫期通りに運んだのですから、目出度と云はなければなりません。奥さんもお嬢さんも如何にも幸福らしく見えました。私も幸福だつたのです。けれども私の幸福には黑い影が隨いてゐました。私は此幸福が最後に私を悲しい運命に連れて行く導火線ではなからうかと思ひました。

結婚した時お嬢さんが、――もうお嬢さんではありませんから、妻と云ひます。――妻が、何を思ひ出したのか、二人でKの墓參りをしようと云ひ出しました。私は意味もなく唯ぎよつとしました。何うしてそんな事を急に思ひ立つたかと聞きました。妻は二人揃つて御參りをしたら、Kが嘸喜ぶだらうと

云ふのです。私は何事も知らない妻の顔をしげ〳〵眺めてゐましたが、妻から何故そんな顔をするのかと問はれて始めて氣が付きました。

私は妻の望み通り二人連れ立つて雜司ヶ谷へ行きました。私は新しいKの墓へ水をかけて洗つて遣りました。妻は其前へ線香と花を立てました。二人は頭を下げて、合掌しました。妻は定めて私と一所になつた顚末を述べてKに喜んで貰ふ積でしたらう。私は腹の中で、たゞ自分が惡かつたと繰返す丈でした。

其時妻はKの墓を撫でゝ見て立派だと評してゐました。其墓は大したものではないのですけれども、私が自分で石屋へ行つて見立たりした因緣があるので、妻はとくに左右云ひたかつたのでせう。私は其新しい墓と、新しい私の妻と、それから地面の下に埋められたKの新しい白骨とを思ひ比べて、運命の冷罵を感ぜずにはゐられなかつたのです。私はそれ以後決して妻と一所にの墓參りをしない事にしました。

五十二

『私の亡友に對する斯うした感じは何時迄も續きました。實は私も初からそれを恐れてゐたのです。年來の希望であつた結婚すら、不安のうちに式を擧げたと云へば云へない事もないでせう。然し自分で自分の先が見えない人間の事ですから、ことによると或は是で私の心持を一轉して新しい生涯に入る端緒になるかも知れないとも思つたのです。所が愈〳〵夫として朝夕妻と顏を合せて見ると、私の果敢ない希望は手嚴しい現實のために脆くも破壞されてしまひました。私は妻と顏を合せてゐるうちに、卒然Kに脅かされるのです。つまり妻が中間に立つて、Kと私を何處迄も結び付けて離さないやうにするのです。妻の何處にも不足を感じない私は、たゞ此一點に於て彼女を遠ざけたがりました。すると女の胸にはすぐ夫が映ります。映るけれども、理由は

解らないのです。私は時々妻から何故そんなに考へてゐるのだとか、何か氣に入らない事があるのだらうとかいふ詰問を受けました。笑つて濟ませる時はそれで差支ないのですが、時によると、妻の癇も高じて來ます。しまひには『あなたは私を嫌つてゐらつしやるんでせう』とか、『何でも私に隱してゐらつしやる事があるに違ない』とかいふ怨言も聞かなくてはなりません。私は其度に苦しみました。

私は一層思ひ切つて、有の儘を妻に打ち明けようとした事が何度もあります。然しいざといふ間際になると自分以外のある力が不意に來て私を抑へ付けるのです。私を理解してくれる貴方の事だから、說明する必要もあるまいと思ひますが、話すべき筋だから話して置きます。其時分の私は妻に對して己を飾る氣は丸でなかつたのです。もし私が亡友に對すると同じやうな善良な心で、妻の前に懺悔の言葉を並べたなら、妻は嬉し涙をこぼしても私の罪を許してくれたに違ないのです。それを敢てしない私に利害の打算がある筈はありません。私はたゞ妻の記憶に暗黑な一點を印するに忍びなかつたから打ち明けなかつたのです。純白なものに一雫の印氣でも容赦なく振り掛けるのは、私にとつて大變な苦痛だつたのだと解釋して下さい。

一年經つてもKを忘れる事の出來なかつた私の心は常に不安でした。私は此不安を驅逐するために書物に溺れようと力めました。私は猛烈な勢ひをもつて勉强し始めたのです。さうして其結果を世の中に公にする日の來るのを待ちました。けれども無理に目的を拵へて、無理に其目的の達せられる日を待つのは嘘ですから不愉快です。私は何うしても書物のなかに心を埋めてゐられなくなりました。私は又腕組をして世の中を眺めだしたのです。

妻はそれを今日に困らないから心に弛みが出るのだと觀察してゐたやうでした。妻の家にも親子二人位は坐つてゐて何うか斯うか暮して行ける財產がある上に、私も職業を求めないで差支のない境遇にゐたのですから、さう思はれるのも尤もです。私も幾分かスポイルされた氣味がありませう。然し私

の動かなくなつた原因の主なものは、全く其處にはなかつたのです。叔父に欺かれた當時の私は、他の頼みにならない事をつく〳〵と感じたには相違ありませんが、他を惡く取る丈あつて、自分はまだ確な氣がしてゐました。世間は何うあらうとも此己は立派な人間だといふ信念が何處かにあつたのです。それがKのために美事に破壞されてしまつて、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふら〳〵しました。他に愛想を盡かした私は、自分にも愛想を盡かして動けなくなつたのです。

五十三

『書物の中に自分を生埋にする事の出來なかつた私は、酒に魂を浸して、己れを忘れようと試みた時期もあります。私は酒が好きだとは云ひません。けれども飲めば飲める質でしたから、たゞ量を頼みに心を盛潰さうと努めたのです。此淺薄な方便はしばらくするうちに私を猶厭世的にしました。私は爛酔の眞最中に不圖自分の位置に氣が付くのです。自分はわざと斯んな眞似をして己れを僞つてゐる愚物だといふ事に氣が付くのです。すると身振ひと共に眼も心も醒めてしまひます。時には いくら飲んでも斯うした假裝狀態にさへ入り込めないで無暗に沈んで行く場合も出て來ます。其上技巧で愉快を買つた後には、屹度沈鬱な反動があるのです。私は自分の最も愛してゐる妻と其母親に、何時でも其處を見せなければならなかつたのです。しかも彼等は彼等に自然な立場から私を解釋して掛ります。

妻の母は時々氣拙い事を妻に云ふやうでした。それを妻は私に隱してゐました。然し自分は自分で、單獨に私を責めなければ氣が濟まなかつたらしいのです。責めると云つても、決して強い言葉ではありません。妻から何か云はれた爲に、私が激した例は殆どなかつた位ですから。妻は度々何處が氣に入らないのか遠慮なく云つて吳れと頼みました。それから私の未來のために

酒を止めろと忠告しました。ある時は泣いて『貴方は此頃人間が違つた』と云ひました。それ丈なら未可いのですけれども、『Kさんが生きてゐたら、貴方もそんなにはならなかつたでせう』と云ふのです。私は左右かも知れないと答へた事がありましたが、私の答へた意味と、妻の了解した意味とは全く違つてゐたのですから、私は心のうちで悲しかつたのです。それでも私は妻に何事も説明する氣にはなれませんでした。

私は時々妻に詫まりました。それは多く酒に酔つて遅く歸つた翌日の朝でした。妻は笑ひました。或は默つてゐました。たまにぽろ〳〵と涙を落す事もありました。私は何方にしても自分が不愉快で堪まらなかつたのです。だから私の妻に詫まるのは、自分に詫まるのと詰まり同じ事になるのです。私はしまひに酒を止めました。妻の忠告で止めたといふより、自分で厭になつたから止めたと云つた方が適當でせう。

酒は止めたけれども、何もする氣にはなりません。仕方がないから書物を

讀みます。然し讀めば讀んだなりで、打ちやつて置きます。私は妻から何の爲に勉強するのかといふ質問を度々受けました。私はたゞ苦笑してゐました。然し腹の底では、世の中で自分が最も信愛してゐるたつた一人の人間すら、自分を理解してゐないのかと思ふと、悲しかつたのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇氣が出せないのだと思ふと益〳〵悲しかつたのです。私は寂寞でした。何處からも切り離されて世の中にたつた一人住んで居るやうな氣のした事も能くありました。

同時に私はKの死因を繰返し〳〵考へたのです。其當座は頭がたゞ戀の一字で支配されて居た所爲でもありませうが、私の觀察は寧ろ簡單でしかも直線的でした。Kは正しく失戀のために死んだものとすぐ極めてしまつたのです。しかし段々落ち付いた氣分で、同じ現象に向つて見ると、さう容易くは解決が着かないやうに思はれて來ました。

現實と理想の衝突、——それでもまだ不十分でした。私は仕舞にKが私のやうにたつた一人で淋しくつて仕方が

なくなつた結果、急に所決したのではなからうかと疑ひ出しました。さうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じやうに辿つてゐるのだといふ豫覺が、折々風のやうに私の胸を横過り始めたからです。

五十四

『其内妻の母が病氣になりました。醫者に見せると到底癒らないといふ診斷でした。私は力の及ぶかぎり懇切に看護をしてやりました。是は病人自身の爲でもありますし、又愛する妻の爲でもありましたが、もつと大きな意味からいふと、ついに人間の爲でした。私はそれ迄にも何かしたくつて堪らなかつたのだけれども、何もする事が出來ないので已を得ず懷手をしてゐたに違ありません。世間と切り離された私が、始めて自分から手を出して、幾分でも善い事をしたといふ自覺を得たのは此時でした。私は罪滅ぼしとでも名づけなければならない、一種の氣分に支配されてゐたのです。

母は死にました。私と妻はたつた二人ぎりになりました。妻は私に向つて、是から世の中で頼りにするものは一人しかなくなつたと云ひました。自分自身さへ頼りにする事の出來ない私は、妻の顔を見て思はず涙ぐみました。さうして妻を不幸な女だと思ひました。又不幸な女だと口へ出しても云ひました。妻は何故だと聞きます。妻には私の意味が解らないのです。私もそれを説明してやる事が出來ないのです。妻は泣きました。私が不斷からひねくれた考へで彼女を觀察してゐるために、そんな事も云ふやうになるのだと恨みました。

母の亡くなつた後、私は出來る丈妻を親切に取り扱つて遣りました。たゞ當人を愛してゐたから許りではありません。私の親切には個人を離れてもつと廣い背景があつたやうです。丁度妻の母の看護をしたと同じ意味で、私の心は動いたらしいのです。妻は滿足らしく見えました。けれども其滿足のう

ちには、私を理解し得ないために起るぼんやりした稀薄な點が何處かに含まれてゐるやうでした。然し妻が私を理解し得たにした所で、此物足りなさは増すとも減る氣遣はなかつたのです。女には大きな人道の立場から來る愛情よりも、多少義理をはづれても自分丈に集注される親切を嬉しがる性質が、男よりも強いやうに思はれますから。

妻はある時、男の心と女の心とは何うしてもぴたりと一つになれないものだらうかと云ひました。私はたゞ若い時ならなれるだらうと曖昧な返事をして置きました。妻は自分の過去を振り返つて眺めてゐるやうでしたが、やがて微な溜息を洩らしました。

私の胸には其時分から時々恐ろしい影が閃きました。初めはそれが偶然外から襲つて來るのです。私はぞつとしました。私はぞつとしました。然ししばらくしてゐる中に、私の心が其物凄い閃きに應ずるやうになりました。しまひには外から來ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでゐるものゝ如く

に思はれ出して來たのです。私はさうした心持になる度に、自分の頭が何うかしたのではなからうかと疑つて見ました。けれども私は醫者にも誰にも診て貰ふ氣にはなりませんでした。

私はたゞ人間の罪といふものを深く感じたのです。其感じが私をKの墓へ毎月行かせます。其感じが私に妻の母の看護をさせます。さうして其感じが妻に優しくして遣れと私に命じます。私は其感じのために、知らない路傍の人から鞭うたれたいと迄思つた事もあります。斯うした階段を段々經過して行くうちに、人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つ可きだといふ氣になります。自分で自分を鞭つよりも、自分で自分を殺すべきだといふ考へが起ります。私は仕方がないから、死んだ氣で生きて行かうと決心しました。

私がさう決心してから今日迄何年になるでせう。私と妻とは元の通り仲好く暮して來ました。私と妻とは決して不幸ではありません、幸福でした。然し私の有つてゐる一點、私に取つては容易ならん此一點が、妻には常に暗黑

に見えたらしいのです。それを思ふと、私は妻に對して非常に氣の毒な氣がします。

五十五

『死んだ積で生きて行かうと決心した私の心は、時々外界の刺戟で躍り上がりました。然し私が何の方面かへ切つて出ようと思ひ立つや否や、恐ろしい力が何處からか出て來て、私の心をぐいと握り締めて少しも動けないやうにするのです。さうして其力が私に御前は何をする資格もない男だと抑へ付けるやうに云つて聞かせます。すると私は其一言で直ぐたりと萎れて仕舞ひます。しばらくして又立ち上がらうとすると、又締め付けられます。私は齒を食ひしばつて、何で他の邪魔をするのかと怒鳴り付けます。不可思議な力は冷かな聲で笑ひます。自分で能く知つてゐる癖にと云ひます。私は又ぐたりとなります。

波瀾も曲折もない單調な生活を續けて來た私の內面には、常に斯うした苦い戰爭があつたものと思つて下さい。妻が見て齒痒がる前に、私自身が何層倍齒痒い思ひを重ねて來たか知れない位です。私がこの牢屋の中に凝として居る事が何うしても出來なくなつた時、又その牢屋を何うしても突き破る事が出來なくなつた時、必竟私にとつて一番樂な努力で遂行出來るものは自殺より外にないと私は感ずるやうになつたのです。貴方は何故と云つて眼を瞬るかも知れませんが、何時も私の心を握り締めに來るその不可思議な恐ろしい力は、私の活動をあらゆる方面で食ひ留めながら、死の道丈を自由に私のために開けて置くのです。動かずにゐれば兎も角も、少しでも動く以上は、其道を歩いて進まなければ私には進みやうがなくなつたのです。

私は今日に至る迄既に二三度運命の導いて行く最も樂な方向へ進まうとした事があります。然し私は何時でも妻に心を惑かされました。さうして其妻

を一所に連れて行く勇氣は無論ないのです。妻に凡てを打ち明ける事の出來ない位な私ですから、自分の運命の犧牲として、妻の天壽を奪ふなどといふ手荒な所作は、考へてさへ恐ろしかつたのです。私に私の宿命がある通り、妻には妻の廻り合せがあります。二人を一束にして火に燒べるのは、無理といふ點から見ても、痛ましい極端としか私には思へませんでした。

同時に私丈が居なくなつた後の妻を想像して見ると如何にも不憫でした。母の死んだ時、是から世の中で賴りにするものは私より外になくなつたと云つた彼の女の述懷を、私は腸に沁込むやうに記憶させられてゐたのです。私はいつも躊躇しました。妻の顏を見て、止して可かつたと思ふ事もありました。さうして又凝と竦んで仕舞ひます。さうして妻から時々物足りなさうな眼で眺められるのです。

記憶して下さい。私は斯んな風にして生きて來たのです。始めて貴方に鎌倉で會つた時も、貴方と一所に郊外を散歩した時も、私の氣分に大した變りはなかつたのです。私の後には何時でも黑い影が括ッ付いてゐました。私は妻のために、命を引きずつて世の中を歩いてゐたやうなものです。貴方が卒業して國へ歸る時も同じ事でした。九月になつたらまた貴方に會はうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く會ふ氣でゐたのです。秋が去つて、冬が來て、其冬が盡きても、屹度會ふ積でゐたのです。

すると夏の暑い盛りに明治天皇が崩御になりました。其時私は明治の精神が天皇に始まつて天皇に終つたやうな氣がしました。最も强く明治の影響を受けた私どもが、其後に生き殘つてゐるのは必竟時勢遲れだといふ感じが烈しく私の胸を打ちました。私は明白さまに妻にさう云ひました。妻は笑つて取り合ひませんでしたが、何を思つたものか、突然私に、では殉死でもしたら可からうと調戯ひました。

五十六

「私は殉死といふ言葉を殆んど忘れてゐました。平生使ふ必要のない字だから、記憶の底に沈んだ儘、厲れかけてゐたものと見えます。妻の笑談を聞いて始めてそれを思ひ出した時、私は妻に向つてもし自分が殉死するならば、明治の精神に殉死する積だと答へました。私の答へも無論笑談に過ぎなかつたのですが、私は其時何だか古い不要な言葉に新しい意義を盛り得たやうな心持がしたのです。

それから約一箇月程經ちました。御大葬の夜私は何時もの通り書齋に坐つて、相圖の號砲を聞きました。私にはそれが明治が永久に去つた報知の如く聞えました。後で考へると、それが乃木大將の永久に去つた報知にもなつてゐたのです。私は號外を手にして、思はず妻に殉死だ〳〵と云ひました。

私は新聞で乃木大將の死ぬ前に書き殘して行つたものを讀みました。西南戰爭の時敵に旗を奪られて以來、申し譯の爲に死なう〳〵と思つて、つい今日迄生きてゐたといふ意味の句を見た時、私は思はず指を折つて、乃木さんが死ぬ覺悟をしながら生きながらへて來た年月を勘定して見ました。西南戰爭は明治十年ですから、明治四十五年迄には三十五年の距離があります。乃木さんは此三十五年の間死なう〳〵と思つて、死ぬ機會を待つてゐたらしいのです。私はさういふ人に取つて、生きてゐた三十五年が苦しいか、また刃を腹へ突き立てた一刹那が苦しいか、何方が苦しいだらうと考へました。

夫から二三日して、私はとう〳〵自殺する決心をしたのです。私に乃木さんの死んだ理由が能く解らないやうに貴方にも私の自殺する譯が明らかに呑み込めないかも知れませんが、もし左右だとすると、それは時勢の推移から來る人間の相違だから仕方がありません。或は個人の有つて生れた性格の相違と云つた方が確かも知れません。私は私の出來る限り此不可思議な私とい

ふものを、貴方に解らせるやうに、今迄の敍述で己れを盡した積です。

私は妻を殘して行きます。私がゐなくなつても妻に衣食住の心配はないのは仕合せです。私は妻に殘酷な驚怖を與へる事を好みません。私は妻に血の色を見せないで死ぬ積です。妻の知らない間に、こつそり此世から居なくなるやうにします。私は死んだ後で、妻から頓死したと思はれたいのです。氣が狂つたと思はれても滿足なのです。

私が死なうとしてから、もう十日以上になりますが、その大部分は貴方に此長い自敍傳の一節を書き殘すために使用されたものと思つて下さい。始めは貴方に會つて話をする氣でゐたのですが、書いて見ると、却て其方が自分を判然描き出す事が出來たやうな心持がして嬉しいのです。私は醉興に書くのではありません。私を生んだ私の過去は、人間の經驗の一部分として、私より外に誰も語り得るものはないのですから、それを僞りなく書き殘して置く私の努力は、人間を知る上に於て、貴方にとつても、外の人にとつても、

徒勞ではなからうと思ひます。渡邊華山は邯鄲といふ畫を描くために、死期を一週間繰延べたといふ話をつい先達て聞きました。他から見たら餘計な事のやうにも解釋できませうが、當人にはまた當人相應の要求が心の中にあるのだから已むを得ないとも云はれるでせう。私の努力も單に貴方に對する約束を果すためばかりではありません。半ば以上は自分自身の要求に動かされた結果なのです。

然し私は其要求を果しました。もう何にもする事はありません。此手紙が貴方の手に落ちる頃には、私はもう此世には居ないでせう。とくに死んでゐるでせう。妻は十日ばかり前から市ケ谷の叔母の所へ行きました。叔母が病氣で手が足りないといふから私が勸めて遣つたのです。私は妻の留守の間にこの長いものゝ大部分を書きました。時々妻が歸つて來ると、私はすぐそれを隱しました。

私は私の過去を善惡ともに他の參考に供する積です。然し妻だけはたつた

一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に對してもつ記憶を、成るべく純白に保存して置いて遺りたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死んだ後でも、妻が生きてゐる以上は、あなた限りに打ち明けられた私の祕密として、凡てを腹の中に仕舞つて置いて下さい』

こゝろ　終

大正三年九月十七日印刷
大正三年九月二十日發行

著作者　夏目金之助
發行者　岩波茂雄
印刷者　見常喜一
發行所　岩波書店

東京市神田區南神保町十六番地

著作權所有

（定價金壹圓五拾錢）

東洋印刷株式會社印刷

329
223

終